

いま伝えたい

——被爆者から

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ

千葉 児玉三智子さんの体験を聞いて



被爆体験を語る児玉さん(左)

父の背中で見えた惨状
原爆が落とされた当時、児玉さんは7歳だったそうです。広島市内の国民学校、木造校舎の中で被爆、突然のもの凄い光、あっという間に天井の梁が落ち、窓ガラスが壁、机、床、人に突き刺さる。学校での鬼気迫るようす。迎えにきてくれた父の背中におぶさり、家に帰る道々に目にした惨状はこの世の出来事とは思えなかったと言います。体中にやけどや大け

千葉・幕張で開かれた若い世代の「きら」コミュニティ☆交流会」(5月30日)で被爆体験を語った児玉三智子さん(76) 市川市在住の被爆者。千葉支部の岩月佐和子さん(30)の感想です。

〈4〉「命絶つまで被爆者、重く心に



児玉さん(中央)を囲んで

がを負い、逃げ惑う人、家族の最後を看取った話、「自分もそうなるのではないか」と恐怖におびえていたことなど、児玉さんのお話から、当時のようすが本当に迫ってくるように感じられました。

行動し始めたのは…

原爆は、その後も被爆

した方がたを長く苦しめました。就職や結婚で差別や偏見に遭い、また、たくさんの方が流産と死産を繰り返したそうです。児玉さん自身も結婚を諦めたことがあり、その後結婚し授かったお子さんをがんて亡くされるという悲しい経験をしています。

しかし、多くの方がひどい被害に遭う中、占領軍や政府は被爆者を救う手立てを打ちませんでした。その間も被爆の被害で亡くなる方を見て児玉さんは「もう黙っていられない!」と被害を訴えるために行動しはじめたのだそうです。

私にとって原爆は、現地へ行ったこともなく、学校の授業を受けた程度でした。あとは記憶を少し掘り起こしてみると、高校時代、被爆三世の方に会ったことがありません。

しかし、児玉さんのように、被害に遭った方の

胸の内を直接聞くという経験は今までありませんでした。被爆による苦しみ、ひどい扱い…どれをとっても胸が痛くなる思いです。児玉さんの「被爆者は命絶つまで被爆者」という言葉が重く心に響きます。

被爆国日本だからこそ

私は今まで新婦人でさまざまな戦争体験の話を聞く機会がありました。日本軍「慰安婦」だったハルモニたちの話を聞いたり、浅草の浅草寺で東京大空襲の戦跡を巡ったりしたこともあります。そこで70年たった今でも癒えない人々の悲しみの深さを知りました。

こうしたつらい経験を語りだれもが口をそろえて言うのは、「戦争がなければこうした被害に遭う人もいなくなる」ということです。

「武力で人を押さえつけることはいけない、戦争は人を傷つけるだけで何の解決にもならない」とほとんどの人が気づいてきていると感じます。

そして、核兵器によって被害を生み出す悲しみは唯一の被爆国日本だからこそ世界に発信できる。1人の力は小さいかもしれませんが、こうして知ること、戦争など起きてほしくない、だれも傷ついてほしくない」とハッキリと自分の思いを強くすることができました。